薩摩藩出水郷士の研究

―西南戦争を中心として―

藤井徳行　小原健
兵庫教育大学第2部（社会系教育講座）

一　はじめに

西南戦争は最大のそして最後の不平士族の反乱としてつとに有名であるが、この戦争の指導者層の多くが、城山で最期を遂げたと云う事もあって、この戦争の真の目的等について、未だによく判らない面が多い。特に兵士の大部分を占めた旧薩摩藩の郷士達の従軍参加意図については十分解明されてはいない。士族反乱の動機としては、一般的に、士族階級に対する不当な処遇、及び全般的失政とされるが、この当時の鹿児島県政の士族優遇策、城下士と郷士との問題、地方に住み経済的にも貧しい下級郷士の教養の問題等を考えると、他の士族反乱と同じように考えることは出来ない。そこで本稿ではそのような点を踏まえて、この戦争に郷士がどのような意図をもって出軍したのか、あるいはしなかったのかを出水市の郷土誌、従軍日記を中心に調べ、解明していきたい。

又、郷土誌については、鹿児島県立・宮崎県立図書館及び両県内の公立図書館に所蔵されている郷土誌（史）に限った。

そこで、本研究は非常に限定的なものにならざるをえない。対象で云えば、薩摩藩郷士だけで、城下士の実態については郷士と比較するためだけに述べる。西南戦争に参加した他府県の士族達については述べない。農民についても本研究とは関係ないので、取り上げない。史料面でも、郷土誌中心なので、西南戦争の全体像及び個々の戦闘については触れない。

二　戊辰の役と出水郷士

出水郷士は慶応三（一八六七）年九月と十月に、番兵一番隊と外城四番隊として出動したことになっている。一番隊は伊藤祐徳が指揮をして、京都守衛・山陰鎮撫・平潟・若松と転戦した。一方、四番隊は二階堂八兵衛（最初は中村源助）が指揮をして、鳥羽伏見・越後・若松と転戦した。出水郷士は全員で六四人出軍したことになっており、四番隊には阿久根郷の郷士も参加していた。[1] 出水郷士の活躍は、四番隊については二階堂八兵衛の従軍日記『戊辰之役』[2] に詳しく述べられている。又、一番隊については壱岐清兵衛の従軍日記『戊辰之役』[3] に詳しく述べられている。出水郷士の死者は九名であった。

次に、戊辰参加者の表を作ってみると次のようであった。

なお、この表は、『出水郷士軍隊の足あと』から戊辰に従軍したもの、『出水風土誌』から戊辰の戦没者、西南戦役での官軍出軍者・戦死者、薩軍の戦死者を引用したが、石高については『出水麓士族軍役高帳』と『八ケ外城軍役高帳』を引用した。そしてこの麓の範囲であるが、高屋敷と呼ばれた現在の麓の外に向江・市之住連・八幡・野添・上屋・井上・大田・小原・西之口・定之段・丸塚等を含み、(大川内・軸谷・今釜・米ノ津・平松・福之江・庄・西目)は八ケ外城である。高尾・野田は含んでいない。

戊辰参加者名(別称)	前名	高主との関係	高主の名(前名)	石高慶応三年	戦死場所(郷名)
二階堂八兵衛		本人	草次郎	七二	
宮田八兵衛		嫡子	早太	五	
宮田十左衛門		嫡子の嫡子	庄二郎	七	
麦生田有誠		三男		四二	越後
竹添節		嫡子	五郎二	二三	
郡山啓蔵		嫡子	惣右衛門(雄右衛門)	一二	越後
酒勾雄七					
税所弥太郎					
花北宗右衛門		嫡子	順蔵(市部左衛門)	一五	越後長岡
渕上休右衛門	岩男	嫡子	権之丞	二九	
川保徳太郎				二六	会津
本山源五右衛門		本人		三〇	
松本嘉右衛門					伏見
小倉健蔵					
松元甚兵衛		本人		二〇	
前田善兵衛		本人		七五	
平原平八郎		嫡子	嘉兵衛	一九	伏見
高橋龍太郎	仲兵衛	嫡子	甚左衛門	八	
橋元林太		本人		二三	
竹添養庵		嫡子	淡水	一九	
小城仙兵衛	栄助	養子	善兵衛	一二	(軸谷)
樗弥之助	孫次郎	本人		四	
落合藤兵衛	藤太	本人		一八	
松元孫右衛門		本人		七	
松元勇之助					
北原仙蔵					
肱黒良之助		本人		七八	
伊集院登蔵		嫡子	次左衛門	五	
田島七太夫		養子	八郎太	二	
野間口権之丞		本人		九	
原口庄之助					
溝口庄八郎					
尾上八郎太夫					
越牟田助之丞		本人		一六	
河野勘太夫		嫡子	瀬兵門	一〇〇	
田野八郎左衛門					
佐藤治吉					
窪田正八		嫡子の嫡子	猪太郎	一四	(今盆)
植村正(庄)助					
税所孫太郎		養子の嫡子	伊左衛門	五	越後長岡 同
貴島喜右衛門					
清渕伝太郎					
境田勇次郎		養子	次助	四	(米之津)
紙屋宗(惣)右衛門		嫡子	嘉兵門	二一	(平松)
土屋龍太郎		養子	郷右衛門	一六	(平松)
岩元藤之丞(十)		養子	宇左衛門	一八	(平松)
上野武左衛門					
亀川与兵衛					会津
中山祐伸					
有村与右衛門		本人		二五	(大川内)

田口庄左衛門						
早水宗助		養子	善右衛門	○		（西目）
村原辰助						
松木武右衛門						
松本十左衛門						
石松宗徳						
早水六次郎						
松下喜左衛門						
中村正助		嫡子	新右衛門	○		
山田嘉左衛門		本人		九		
伊藤四郎左衛門		本人		一〇〇		
田野鎌（謙）輔		本人		二五		
松元源五衛門		本人		一三		
竹之内真五郎	藤之丞					
大井八郎太夫		本人	次右衛門（五兵衛）	三五		
野間口彦助		本人		三六		
壱岐兵蔵	清兵衛			六九		
岩田潤徳		養子	兵右衛門	二九		
志賀真一郎	幸之助	本人		二五		
糀山覚右衛門		本人		六八		
二宮壮之丞		嫡子		四四		
面高栄助	林太夫	嫡子	丈助	三八		
宗像健彦		本人	栄右衛門	六四		
阿多新太夫		嫡子		三一		
岩切彦市	清太郎	嫡子	六郎左衛門	四九		
平原栄助（介）	仲太夫	嫡子	助右衛門（清吉）	二三		
松元栄熊		嫡子	仲兵衛	七		
土飾仲兵衛		本人	十郎	三		
溝口正太夫		本人		五六		
税所市郎左衛門	政彦	本人		○・○七		
伊藤甚之丞		本人		四九		
中山庄左衛門	与右衛門	本人		四二		
				二二		

そこで、この表から石高が明らかな郷士について調べてみると、次のようなことが明らかになった。戊辰参加者五八名中、高主か嫡子（養子）の参加が五七名、麦生田有誠のみが三男であった。石高の平均でみてみると、戊辰参加者は二七石七斗であった。

これら石高の明らかな郷士を『薩摩出水外城麓屋敷図（慶応三年）』で捜してみると、戊辰参加者は二七名見つかった。

寛政元（一七八九）年の軍役高帳によると、出水の麓（麓・向江・市之住連・八幡・野添・上屋・井上・大田・小原・西之口・定之段・丸塚）衆中は一七〇七人で、石高五八二八石、高持五四〇人で、平均高一〇・八石になる。

外城（大川内・軸谷・平松・米之津・今釜・福之江・庄・西目）衆中の平均石高は更に低く麓衆中の半分に当たる五・二石しかない。これを表にすると次のようになる。

郷名	郷士数	高（石）	高持	平均高	備考
大川内	二百六	四四一	七四	五・六	
軸谷	三八	五七	一〇	五・七	
平松	一八四	二三一	五三	四・四	
米之津	一一七	八七	三四	二・六	
今釜	一八七	一二三	四〇	三・一	
福之江	四八	五二	一二	四・三	
庄	一四一	一九六	三七	五・三	
西目	二一五	四六三	五三	八・七	阿久根市脇本
合計	一一三六	一六二三	三一三	五・二	

これらの事から、戊辰に従軍した出水の郷士は嫡子が多く参加しており、石高の面でも上級郷士の参加が多い。もちろん麓の郷士も多いと言うことが判るので、出水の上級郷士は戊辰の役に参加することは名誉とも思い、一家の存亡を賭けて積極的に参加したと考えられる。

出水郷は国境に位置する国防上重要な地域であったため、江戸時代初めに各地から武士を集めてつくった薩摩藩最強の郷士軍団の拠点であった。戊辰の役では出水郷士はその力を十分に発揮したと言えるのではないか。

三　賞典禄の下賜における差別

明治三年山県有朋・西郷隆盛等の立案によって、中央政府の軍隊として、薩摩・長州・土佐の三藩から、精兵八千を天皇の御親兵とする案が出来上がった。[4]

明治四年二月に、薩摩・長州・土佐の三藩より御親兵として、歩兵・騎兵・砲兵の三兵科合計約一万人を出すことになり、薩摩からは、桐野利秋・種田政明・篠原国幹・野津鎮雄の四人を大隊長として歩兵四大隊・砲兵四隊が御親兵として上京した。[5]

御親兵として上京した薩摩隊の中には、城下士と外城郷士の待遇の差が大きく、郷士兵達には不満[6]があった。そのせいで、御親兵の任期を終えた郷士は帰郷心が強く、大部分の者は帰国した。

帰郷してもますます不信感をふくらますことがあった。それは戊辰の役従軍者に対する軍功賞典の差別が依然として解決されずにいたことである。[7] 城下士に対しては明治二年より早速実施されているのに、郷士出身の従軍者にはまだ実施されていなかった。

薩摩藩から戊辰の役に出軍、鳥羽・伏見から奥羽北越まで転戦した功に対しては、明治二年から十五ケ年間、賞典禄下賜の恩命があったが、これは城下士だけに支給され、且つ秘密にされていた。

政府は明治五年、陸軍・海軍の両省を設置し、御親兵は近衛兵と改称された。[8]

四　出水郷士と西南戦争

開戦当初西郷軍に従軍した出水の郷士は約四百人と言われ、その氏名は明らかではない。又、出水の攻防戦で出陣した郷士は約六百人と言われている。[9] こちらも氏名は明らかではない。そこでこの節では、氏名の明らかな戦死者五九人と『口供書』に記載されている一四人と官軍参加者一二人を対象として、表を作り、西南戦争に対する出水郷士の参加意図を考えてみたい。

高主の名（慶応三年～明治三年）（前名）	高主との関係	薩軍戦死者名	石高 慶応三年	石高 明治三年	○印は戊辰参加者 石高の増減
（多郎太）	本人	中尾兵郎	二一	二一	同じ
（源左衛門）	本人	柿田十五郎	一	二	増一
（熊之助）	本人	池松静蔵	二一	二一	同じ
猿之助	嫡子	宮内蔵市	一五	一四	減一
周助	本人	池田周助	二一	二一	同じ
（仙次郎）	本人	山田嘉右衛門			同じ
休右衛門	嫡子	木場喜藤次	九	九	同じ
休兵衛	弟	税所八郎	一二	一二	同じ
八五郎		渡邊八五郎	○・四	○・七	増○・三
休左衛門		丸尾休左衛門			
長右衛門		川俣次郎兵衛	四	四	同じ

源五右衛門	本人	富山源五衛門	三〇	二八	○	減二
万次郎	嫡子	勝下武右衛門				
健蔵		小倉健蔵	二〇	一九	○	減一
与右衛門	嫡子	宮路次兵衛	一七	一七		同じ
喜平	弟	黒木彦七	五	五		同じ
仲太郎	二男	平原正次郎	○・一	五	増四・九	
（右近）	本人	黒木廣若	九	九	同じ	
駒之助	嫡子	御牧伊兵衛	三	三	同じ	
清左衛門	弟	班目亀太郎	一一	一一	同じ	
甚之丞		房村甚之丞				
武右衛門		谷山武右衛門				
喜平	四男	山田作太郎	五	四	減一	
矢太郎	叔父	松永喜右衛門	○・○六	○・○六	同じ	
武左衛門	甥	麻生善兵衛	○・七	○・七	同じ	
怒賢	嫡子	伊福恕吉郎	一三	一三	同じ	
周蔵	嫡子の嫡子	肱岡周右衛門	三	三	同じ	
實秀		阿多實秀				
良能		田島良能				
亘		野間口亘				
休右衛門	嫡子	遠丈宗右衛門	二〇	一五	減五	
市郎右衛門（清右衛門）	養子	時吉勇右衛門	一一	一一	同じ	
休之丞	二男	種子田半之丞	九	九	同じ	
惣之丞	本人	川内惣之丞	七	一	減六	
直右衛門	二男	山下正市郎	一九	二〇	増一	
新蔵	養子の嫡子	宮崎禎輔	○・○○六	五	増四・九九四	
彦太夫		中尾彦太夫				
（清右衛門）	本人	楠元覚助	○・一	三	増二・九	
仲之道	本人	長野仲之道	○・八	○・八	同じ	
庄之丞	弟	税所四郎左衛門	三	三	同じ	
八五郎	本人	小山八五郎	五	五	同じ	
仲右衛門	本人	土師仲右衛門	五六	四九	減七	
源右衛門	嫡子	坂本仲左衛門	一	一	同じ	
平太（卯次郎）	嫡子の嫡子	山口平太郎	二〇	三〇	増一〇	
隆雪	本人	班目仲左衛門	一六	一六	同じ	
郷右衛門	嫡子	宮路重太郎	一三	一三	同じ	
喜助	嫡子	神田正右衛門	二	一	減一	
金左衛門	本人	梅田喜助	六	六	同じ	
弥右衛門	本人	岩切金左衛門	四	一〇	増六	
庄兵衛	嫡子	図師弥右衛門	○・九九	四	増三・○一	
實輝		隈元甚五郎	八	八	同じ	
守康		阿多實輝				
休右衛門	養子	井上守康	二	二	同じ	
準輔	本人	井上庄助	一八	一八	同じ	
（一介、一性院）	本人	宇田準輔	二	二	同じ	
		川邊浪夫			同じ	

石高の明らかな郷士四三人の合計（四四五・一五六→四五六・二二六）の増は二〇・一〇四で、一人平均にすると、〇・四六八石である。なお平均持ち高は一〇．七三石（明治三年）である。

次に『薩軍の口供書』の中の十四名の郷士について軍役高帳で調べると、次のようであった。

高主の名（前名）	慶応三年当時との関係	口供書記載氏名	石高 慶応三年	石高 明治三年	戊辰参加○石高の増減
要輔	本人	竹添節			○
武左衛門	嫡子	小田原要輔	二五	二五	同じ
（泰珠院）	本人	宮原新助	○	○	同じ
林太郎	嫡子	池田彦太郎	○・一七	八	増七・八三
		是枝陽之助			
		遠竹嘉壮太			
		市ノ瀬勘介	○	○	同じ

次郎	養子	境田勇次郎	四	四	○	同じ
嘉兵衛	本人	久保田與兵衛				
		宮崎弥太郎				
		内ノ浦嘉兵衛	一	二	増一	
(真如坊)	本人	野間口権之丞	七	七	同じ	
		愛甲七郎右衛門				
		松木良右衛門				

石高の明らかな七人の郷士の合計（三七・一七→四六）の増は八・八三石で一人平均すると一・二六一石である。なお平均持ち高は六・五七石（明治三年）である。

これら薩軍の戦死者と処刑された『口供書』の石高の明らかな合計五〇人について計算してみると、石高の一人当たり平均の増は〇・五八石である。又一人平均の持ち高は一〇・二三石である。

官軍参加者一二名について軍役高帳で調べると、次のようであった。

高主の名（前名）	慶応三年当時高主との関係	官軍参加者氏名	石高 慶応三年	石高 明治三年	○印は戊辰参加者 石高の増減
助右衛門	嫡子の嫡子	壱岐秀實			
		溝口重遠			
		入来院重治			
		本田栄蔵	一三	一三	同じ
		浜田盛隆			
(伝蔵)	本人	松元雄次郎			
		竹内正次郎	三九	三七	減二

小右衛門	二男	溝口潔	五	五	○	同じ
庄左衛門（与右衛門）	嫡子の嫡子	松島喜右衛門				
		永池長義				
		中山庄五郎	二二	二〇	減二	
		田野熾				

石高の明らかな郷士四人の合計（七九→七五）の減は四で、一人平均すると、一石の減である。なお平均持ち高は一八・七五石（明治三年）である。

ここで、この表から石高が明らかな郷士について調べてみると、次のような事が明らかになった。石高の平均でみてみると、薩軍戦死者・処刑者は一〇石二斗三升であった。官軍参加者は一八石七斗五升であった。薩軍戦死者・処刑者は平均で石高が増加しているが、官軍参加者は減少している。薩軍戦死者・処刑者では五〇名中、高主・嫡子が四一名で、高主の弟が四名、甥が一名、叔父が一名二男が二名、四男が一名であった官軍参加者は四名のうち三名が本人か嫡子の嫡子で、一名が高主の二男であった。

これら石高の明らかな郷士を『薩摩出水外城麓屋敷図（慶応三年）』で捜してみると、薩軍戦死者・処刑者は九名見つかった。官軍参加者は一名であった。

特に興味を惹いたのは、土師仲右衛門家の場合で、この家では戊辰の役の際に嫡子・仲兵衛が出軍しているのに、西南戦争には高主（慶応三年当時）である仲右衛門が出軍している。又、中山庄左衛門は戊辰の役に参加し、その嫡子の嫡子（庄五郎）は、西南戦争には官軍と

して参加している。

第二項の戊辰の役参加者の表とこれらの点から、次のような事が言えるのではなかろうか。

(1) 戊辰の役の際には、麓を中心とする有力な郷士が高主・嫡子（養子）を出軍させるなどして、積極的に参加した。

(2) 西南戦争には麓の有力な郷士は積極的に参加せず、次男・三男等を出軍させることによって、一応参加と言う大義名分を確保し、西郷に対する忠義より御家の存続を望んだ。西南戦争に出軍したのは軍役高が増加した在郷の貧しい郷士が多かった。

(3) 西南戦争に官軍として参加したのは、軍役高が減少した裕福な郷士に限られた。

又、戦記などによっても次のようなことが言える。

(1) 出水の郷士達は薩摩藩兵の一員として、戊辰の役の際には、伏見・越後・会津と転戦し、激戦を戦い抜き官軍の勝利に多大の貢献をした。それは出水の戦死者が伏見・越後・会津に集中している事でもわかる。

(2) 江戸時代薩摩藩内では最強の軍団だと言われた出水郷士も、西南戦争の出水攻防戦ではあっけなく降伏してしまった。

五　おわりに

以上見てきたように、郷士が西南戦争に何故参加したかについては一概には言えない。色々な判断基準があるとおもわれる。まず私学校徒とそれ以外という分け方がある。

私学校徒については、強制的に入校させられたか否かは別にしても、西南戦争には積極的に参加した。というのは、田原坂等での多くの戦死者を出した勇猛果敢な戦闘を考えれば、戦意をもってこの戦に参加しているのは間違いない。

その私学校の学課の問題がある。漢学と武術の鍛練が中心で、知識情報と云ったものは一切ない。[18] そういう中では城下士達・区長・戸長・西郷の言うことが絶対であり、それ以外の情報はないのであるから判断しようにも出来ない状態である。ということは地方の郷士でも知識情報を持っているものは西南戦争に批判的になる可能性があるということである。この当時地方郷士で知識情報を持っている人達と言えば幕末維新に上京したもの、近衛兵で上京したもの、東京で遊学したものぐらいであろう。

戊辰戦争で上京した郷士達は薩摩藩以外の世界を見て、視野が広くなり、物事に対する批判精神が生まれたと考えられる。そして賞典禄下賜における差別によって城下士に対する不信感が生まれ、それがひいては西郷を中心とする薩軍本営に対する不信感に発展していったと考えられる。そして、私学校派が郷士達の東京遊学並びに上京を禁止しようとした[19]のもこれでうなずける。

私学校徒以外はどうであろうか、私学校徒でない一般の郷士達（いわゆる二番立ち以降の出軍者）は半ば脅迫され無理やり出軍した人達が大半であり、戦意もなく装備も良くなかった。

彼ら貧しい下級郷士の出軍理由は狭い郷の中での人間関係・西郷に対する畏敬の念・長年培われてきた士風等と考えるのが妥当と思われる。薩摩士風をあらわす言葉に「議を言うな」と言う言葉がある。これは上から言われた事は素直にしたがい、即実行すればいいのであるという考え方で、批判をしようものならば腰抜けと罵倒されるのである。以上まとめてみると、色々な要素が絡み合っている。私学校徒か、そうでないか。上級郷士か下級郷士か。戊辰戦争に出軍したか、しな

かったか。区長又は副区長が私学校派か、そうではないか。薩摩藩領から外へでたことがあるかないか。色々な知識情報を持っているかどうか。[112]

絶対的なものでは必ずしもないが、これらを出軍に対して積極的か、消極的かに分けて表にすると次のようになる。

積極派	消極派
私学校徒である。 下級郷士である。 戊辰戦争に出軍していない。 区長又は副区長が私学校派である。 薩摩藩領から外へ出たことがない。 色々な知識や情報を持っていない。	私学校徒でない。 上級郷士である。 戊辰戦争に出軍した。 区長又は副区長が私学校派でない。 薩摩藩領から外へ出たことがある。 色々な知識や情報を持っている。

こう見てくると、郷士の西南戦争に対する思いは複雑多岐に渡っており郷ごとにすべてを割り切って考えることは出来ない。

たとえば、出水の伊藤氏[113]のように、上級郷士であり、戊辰戦争にも参加し、城下士に反感を持っていた郷士でも、区長又は副区長が私学校派と言う事で出軍している。この例が最も典型的であると考える。一般に戊辰出軍に際してはお金が必要であったので、上級郷士が多く出軍した。[114] また、東京遊学や上京できるのも金のある上級郷士と考えられる。情報知識を持っているのも上級郷士と常識的に考えられるので、上級郷士ほど西南戦争に対して大義名分が無いとか将来の展望が見えないとかの判断が出来るので、そういった郷士の多い郷ほど西南戦争に消極的だったと言える。表面は出軍しても配色濃厚となれば、脱隊して郷里に帰る。[115] 地方郷士には帰る郷があるし、守るべき土地もある。

よって西南戦争前半での私学校の郷士の勇猛果敢ぶりと後半での郷士達の敗残兵ぶりの違いは理由のあることなのである。といっても、これが彼ら薩摩の郷士達の活躍をいやしめるものではない。西南戦争通じての戦死率・戦死者数がそれを証明している。[116]

注

(1) 鹿児島県『鹿児島県史・第三巻』（鹿児島県・昭和四二年）の四九四頁を参照。

(2) 秀島実『出水郷士軍団の足あと』（昭和六一年）の一三～二四頁、五一～六八頁、一三一～一四四頁を参照。

(3) 同右の八一～一三〇頁、一四五～一六二頁を参照。

(4) 松下芳男『明治軍制史論上巻』（有斐閣・昭和三一年）の七八頁に次のように述べている。

隆盛は山県の熱心な言葉に動かされて、遂に出京を承諾し「木戸孝允と協議の上、更に土藩にも勧め、薩長土藩の兵を以って、御親兵を組織すべし」と答えた。

(5) 陸軍省『明治軍事史（上）』（原書房・昭和四一年）の六四頁に次のように述べてある。

三藩兵を徴して御親兵と為す　二月一三日、鹿児島藩歩兵四大隊、砲兵四隊、山口藩歩兵三大隊、高知藩歩兵二大隊、騎兵二隊を徴して御親兵と為す爾後編成及び隊号の改変あり

(6) 前掲書『出水郷士軍団の足あと』の一八五頁に次のように述べてある。

例えば明治元年の戊辰の役で、参謀まで勤めた伊藤祐徳も御親兵として上京したのであるが四十五才の彼に対する待遇は、陸軍中尉で近衛一番大隊の会計係という低い待遇であった。

又、『出水郷から見た西南戦争の傷跡』（南日本新聞・平成元年十一月二九日）に次のように出ている。

出水郷平良馬場士族高橋仲兵衛の明治四年中一月七、八日の日記に「七日、晴天、今日夜、第二の七　池田何某、昨日より帰営無之候事」「八日、晴天、今日夜、池田氏坂下御門へ差越候に付、直に帰営之上、被致切腹候事」とあり、郷出身の外城士は、帰隊時刻に遅れれば明朝切腹と厳しく処置されたが、明治六年、城下士で近衛陸軍大尉であった辺見は、夜宿舎を抜け出し新宿ノ妓楼で遊んでいた間に皇城が火事になり、辺見は同僚から「腹を切れ」と迫られたが、近衛都督西郷隆盛は「是れ年少、男子の免れざる所、宜しく其罪を恕すべし」と切腹はおろか不問に付された。

(7) 前掲書『出水郷士軍団の足あと』の一八七～一九六頁に次のように述べてある。

戊辰の役終結後は、軍功禄として西郷二千石、桐野二百石とその他の城下士には翌年より八石から四石それぞれの軍功に応じて支給されたが、外城出身の郷士に対しては一向に支給される気配が無かった。

そこで従軍郷士達は、何回となく（明治七年三月・同八年十一月・同九年一月・同年四月・同十一年四月）歎願書を提出した。結果、軍功賞典はつぎのように決定したが、それでも満足しなかった郷士達は、城下士が貰っていた明治二年から同六年までの分も下賜されるようにと、最後の歎願書を提出した。しかし、これは採用されなかった。

明治十一年四月

一戊辰之役、兵役之節、番兵六番隊ニて出立、三等軍功賞典禄五石
一明治元年八月、越後新潟ヨリ会津江進軍、同年十二月帰藩

右之通、相違無御座候也

面高栄之助
宗像正溝
宇田準勝
阿多新太夫
岩切彦一
平原英介
松元栄熊
土師径徳
溝口正太夫
池上十郎左衛門

明治十一年四月

合七拾六人

又、『大隈町誌』（大隈町・平成二年）の四三五頁に次のように述べてある。

そこで外城兵は城下士と同じく明治二年から六年迄五ケ年の賞典禄

処分未済に対する禄高整理公債証書の下付願いを出すこととなった。岩川でも出軍者が連名で出願している。明治三十一年六月廿五日附の願書では「一石高弐拾五石、但三等壱ケ年五石、此公債額高百五拾円六拾六銭六厘」となっている。これらの運動は明治二十二から起こされ、三十一年六月、四十二年九月、十一月に出されている。結果は判明していない。

(8) 高崎親義「西郷隆盛暗殺計画事件の真相」（秋田書店『歴史と旅』の平成四年四月号所収）の一九二～二〇一頁を参照。

(9) 『出水の歴史と物語』（出水市・昭和四二年）の二八六頁と二九三頁を参照。

(10) 垂水市『垂水市史・下巻』（垂水市・昭和五三年）の一一二三～一一二四頁を参照。

(11) 村野守治「西南戦争の研究」（鹿児島女子短期大学『紀要』一九八五年、第二十号）の一頁に次のような記述がある。

八年末になると私学校の先輩達は私学校の勢力を堅実にしようとし、各私学校員の名簿を編纂し、これに登録して本部に納めた者は県外に旅行することを禁ずる約を結ぼうと内決し、これを一斉に各私学校で総会を開いて決定しようと謀った。

(12) 野元純彦「西南戦争と串木野郷士族」（『鹿児島史学論集』鹿児島県高等学校歴史部会・昭和四九年所収）の二六三頁の中で、下級郷士の教養の問題について次のように述べている。

この階層になると生計を立てることが目前の重要問題であって政治上の問題などを考える余裕を持っていなかったこと、その二は彼等の教養の程度から云って政治的な形而上の問題などを切実に自己の問題として採り上げるほどの関心がなかった事である。

(13) 本文の注(6)を参照。

(14) 鹿児島市『鹿児島市史Ⅰ』（鹿児島市・昭和四四年）の六一八～六一九頁を参照。

(15) 大隈町誌編纂委員会『大隈町誌』（大隈町・平成二年）三四六頁を参照。

(16) 村野守治「西南戦争の研究」（鹿児島女子短期大学『紀要』第二十号・一九八五年所収）の十五頁を参照。

Study of Izumi Country Warriors of Satsuma Clan

— from Viewpoint of Seinan War —

Noriyuki Fujii & Ken Ohara

At the border of the fief of Satsuma clan, an important area for the fief defense, Izumi district functioned as a base of the corps of Satsuma clan's strongest country warriors (samurais) fathered from every part of the fief at the beginning of Edo period.

The Izumi country warriors fully displayed their power in the Boshin War, but easily surrendered in the Izumi battle in Seinan War. The reasons may be as follows:

The upper-class Izumi country warriors obtained a wider view through their visit to Kyoto, far away from Satsuma. This gave them a critical mind and helped them to have a distrust of the castle town warriors through the distinction in granting the rewards and stipend. This was also a suspicion against the Satsuma Force headquarters chiefly comprising Takamori Saigo and other castle town warriors. In addition, since the upper-class country warriors could see that the relation of sovereign and subjects for the Seinan War were unclear as well as future vision, they did not positively participated in the Selnan War.